

日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催
ホームカミングデイ・日女祭同日企画 講演会
授業実践報告「プロジェクト実践演習Ⅱ」の取り組み

Japan Women's University Symposium:
A Report on the Affective Side of "Seminar for Planning Projects II"

齋藤慶子、大谷洋貴、田中雅文
Keiko Saito, Hiroki Otani, Masafumi Tanaka

I. はじめに

2016年度からのカリキュラムで設置された教育学科専門科目「プロジェクト実践演習Ⅱ」(2018年度授業担当教員：齋藤慶子・大谷洋貴)では、毎年、日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催による講演会(日女祭同日企画・ホームカミングデイ)を企画・運営してきた。3年目を迎える2018年度は、受講生が57名と前年度受講生の2倍となり、授業の教育効果の観点から、2つの講演会を企画・開催した。

一つは、10月11日(木)16:00-18:00、日本女子大学西生田キャンパス九十年館B棟15番教室において開催した「必見!平成の伊能忠敬に聞く一遊びの中の教育的意義」である。講師は、筑波大学名誉教授(元副学長・理事)で、現在は地名研究者としても活躍されている谷川彰英氏であった。もう一つは、10月20日(土)13:00-15:00、日本女子大学西生田キャンパス九十年館A棟第1会議室において開催した「創造は想像以上だ!一出前事業とユニバーサルデザインでつくる未来」である。講師は、株式会社バンダイの岩村剛氏であった。

以下に、講演会の企画・運営に関わる授業過程の記録について記し、2つの講演会当日の記録については、稿を改め、講演会ごとに記す。



写真1：授業風景

II. 「プロジェクト実践演習Ⅱ」の取り組み

本年度の「プロジェクト実践演習Ⅱ」の取り組みを報告する。本科目は、学生たちが、講演会⁽¹⁾やシンポジウムを企画・立案し、運営に携わる中で、本学の建学の精神である「自学・自動」的な学びの体得を目指すものである。

今年度は、昨年度同様、「自学・自動的な姿勢で取り組む」といった態度面だけでなく、「①企画内容を立案・検討する(考えを設計・企画する力、コミュニケーション能力の獲得)」、「②企画・運営した内容についてプレゼンテーションを行う(プレゼンテーション能力の獲得)」、「③役割分担を行い、講演依頼、広報、当日の運営を学生主体で実施する(企画を実行・運営する力、チーム活動能力の獲得)」

の能力を育てることを目標とした⁽²⁾。これらの能力は、教員志望学生だけでなく社会人の基礎として求められるものとする。

実際の「プロジェクト実践演習Ⅱ」は、以下の5つのパートで行った。講義の時間以外に、夏休み期間中及び後期授業開始後の昼休み等も利用して準備を進めた。

パート1は、オリエンテーションとして、演習の目標と趣旨説明、グループ分けを行った。また、本授業が反復履修可能科目であるため、昨年度に引き続いて今年度も履修している学生の協力を得て、昨年（2017）度の成果共有の機会を持った。

パート2は、講演会ゲストの検討をした。ゲスト選定は、各グループで企画案を作成し、クラス全体に対してプレゼンテーションをした上で投票・決定する方法を採用した。学生たちからは、「メイクアップや第一印象について学びたい」「社会で活躍する女性リーダーを呼びたい」「ママ・タレントの方に子育てと仕事の両立や美の維持について聞きたい」「男性保育士の方を呼びたい」「絵本作家を呼びたい」「おもちゃを作っている人」「面白い理科実験や授業をする人」「体操のお兄さん」といった希望が挙げられた。こうした経緯の中で、「資生堂、林明子氏、日本女子大学出身の社長、市岡元気氏、バンダイ」といった具体的なゲスト案が出され、ゲ

スト選定の投票を行った。しかし、投票の結果ゲスト候補となっても、ゲストのスケジュールが講演日程と合わない、ゲスト招聘に係る費用（講演料）が予算を大幅に超過する等の理由から折り合いがつかず、最終的にゲストを「株式会社バンダイ」に決定したのは6月末となった。

また、既述の通り、今年度の履修者数は前年度の約2倍（57名）であり、1つの講演会開催で、学生全員が実行・運営に関わる役割を担うことは困難であった。そのため、ゲストが決定した段階で、教員側から谷川彰英氏による講演会を提示し、「③役割分担を行い、講演依頼、広報、当日の運営を学生主体で実施する（企画を実行・運営する力、チーム活動能力の獲得）」の能力に関わる学習は、2講演会・2チーム体制で取り組むこととした。

パート3以降は、谷川彰英氏の講演会（以下、谷川プロジェクトと略す）を齋藤が担当し、株式会社バンダイの講演会（以下、バンダイプロジェクトと略す）を主に大谷が担当して授業を展開した。具体的には、授業の最初と最後の10分ずつを全体での共有化の時間（42番教室）とし、間の70分を各チームでの個別の活動を行う時間（谷川：33番教室、バンダイ：42番教室）としてすすめた。

パート3と4では、各講演会に関する事前学習および各講演会タイトルの検討・決定を行った。

図表1 谷川・バンダイプロジェクトの授業展開（パート3以降）

	パート	項目	授業の流れ
谷川プロジェクト	3	事前学習	・教員からの資料提供と講義 ・谷川氏の出演テレビ番組（録画）の視聴
	4	講演会タイトル 検討・決定	・調べ学習とグループ発表
	5	広報・運営等の活動	・チラシの作成 ・講演会グッズの作成 ・当日の運営とその準備
バンダイプロジェクト	パート	項目	授業の流れ
	3・4	講演会タイトル 検討・決定	・教員からの資料提供 ・調べ学習とグループ発表
	5	広報・運営等の活動	・チラシやポスターの作成 ・当日の運営とその準備

谷川プロジェクトでは、パート3で、齋藤からの情報提供と講義を中心とした事前学習を行った。具体的には、柳田国男の思想、なかでも「遊び」や「なぞとき」に関する論考、谷川氏の社会科教育や地名に関する著作などを取り上げた。また、谷川氏が出演した地名や苗字に関するテレビ番組（録画）を視聴し、イメージを深めていった。

このように、パート3で、クラス全体の共通理解を図り、全ての学生が演習に参加していく土台形成を行った上で、続くパート4では、講演会で谷川氏から聞きたい内容や講演会のタイトルの検討を行った。具体的には、コンピュータ演習室を利用して情報収集をし、グループごとにレジュメやパワーポイント等の形式で発表をさせた。各グループのタイトル案を発表する段階から、学生の代表者を司会とし、主体的・積極的な授業展開を目指した。タイトル案としては、「歩いて学んで学びのすすめー遊びの中の教育的意義」「遊びのすすめ」「遊びって学びだ！ー平成の伊能忠敬に聞く遊びの中の教育的意義」といったものがあがった。

バンダイプロジェクトでは、パート3とパート4を同時進行して授業を展開した。大谷から「ユニバーサルデザイン」に関する資料提供を行った。その上で、学生の代表者を司会として、「おもちゃづくり」や「ユニバーサルデザインに関するおもちゃ会社の具体的な取り組み」「CSRって何か？」など具体的に講演会で聞きたいことをグループ活動と全体での共有化を重ねて絞りこんだ。その後、講演会タイトルを検討・決定した。

パート5は、「交渉・統括」「広報」「運営・企画」のチームを編成し、それぞれ作業を進めていった。

「交渉・統括」は、谷川氏や教員（齋藤）、あるいはバンダイや教員（大谷・齋藤）との連絡や各チームの作業指示等の役目を担った。クラス全体で協議をする場面では、司会として中心的な働きをした。

「広報」は、チラシやポスターの作成等を行った。とくに、谷川プロジェクトでは、広報活動の一環で、オリジナルグッズの作成も行った。「身近で使いやすいもの」という方針の下、定番のファイルやエコバックではないものとして、オリジナルのブックカバー作りが行なわれた。費用は、「教育学科の会」より支援を受けた。

「運営・企画」は、当日のプログラム作りや司会



写真2：学生によるオリジナルのブックカバー

進行等の役目を担った。これら3つのチームと教員2名が連携を取る形で企画が行なわれた。最終的な講演会は、後期の授業期間となったが、受講生たちは前期終了後も打ち合わせ等で集まり、主体的に準備をしていた。また、演習の中で「予算の立て方」や「メールの出し方」といった基本的なスキルについても教員が指導を行った。

Ⅲ. 受講生の感想

本講演会の企画・運営は、前期の授業期間中から後期に至るまでの長期的なプロジェクトとなった。後期の講演会終了後、任意のアンケートを行い、20名から回答を得た。

1. 授業の難易度

アンケートでは、まず、本授業の取り組みの難易度は、どの程度であったかを5件法（とても難しかった・難しかった・想像通り・意外と楽しかった・楽しかった）で尋ねた。図表2に示した結果からは、95%近い学生たちが難しい（「とても難しかった」「難しかった」の合計）と感じていたことが分かる。

次にアンケートでは、授業が難しかった理由を自由記述で尋ねた。「授業を受けていて、一つ一つ決めるのにとっても時間と頭を使うのだと分かりました」「話合いの場面で意見をまとめることが難しかった」といった「意見集約・決定の難しさ」を理由として挙げる回答が最も多かった。また、「最初に想定していたことから、どんどん変更点が出てき

たり、準備することが多く、いかに一人ひとりができることを探し、協力して進めていくかという点が難しかった」といった回答からは、「見通しをもって活動することの難しさ」や「主体的な協力体制を構築することの難しさ」が窺えた。さらに、「人数が多く役割分担していたので、連絡がとりにくかった」「人数が多かったため、決めたいことが、なかなか決まらなかった」「他のグループがどのようなことをしているのか、判断できなかった」といった「受講者数の多さ」に起因する学生間の情報共有の難しさや作業体制の問題点を挙げる意見も多くみられた。こうした意見は、次年度のカリキュラムに反映させ、改善を図っていく。

この他に、数は少なかったが「異なる学年のまとめ方」に戸惑った学生の意見もみられた。昨年度の授業の履修者は2年生のみであり、学年進行とともに今年度新たに浮上した課題である。教育学科の専門科目の多くを占める教職科目は、学年ごとの積み上げ型のカリキュラムである。そのため、「同一学年の学生との授業がほとんどであること」、それゆえに「他の学年との混合で受講する機会が少ないこと」を考えると、当然の課題ともいえる。だが、こうした能力は、実社会のあらゆる場面で求められる力であり、来年度の授業では、「異なる学年間のコミュニケーション」を円滑にすすめることに関する新たな工夫が求められることになる。

2. 学習効果

ほとんどの学生にとって「講演会を企画する」ことは初めての経験であり、企画立案、講演会開催までの意思決定の仕方、段取りを組んでの企画運営は「未知の領域」であった。学生たちは、本授業のどこに「学習効果」を感じ何を獲得したのかを、自由記述方式で尋ねた。ここでは、シラバスに記した3つの授業の到達目標⁽³⁾に即して、アンケート結果を分析していく。

まず一つ目は、「企画内容を立案・検討する（考えを設計・企画する力、コミュニケーション能力）」についてである。「高校時代の生徒会等の活動で、講演者の方、講演内容が決まっているものについては運営したことがありましたが、何も決まっていないところから企画することは初めて経験しました。」という回答にもみられるように、講演会の運営に携

わる経験は高校段階までに既に行っているが、講演会のコンセプトから学生主体で考えることは、反復履修の学生以外ほぼ初めてであった。「講演者の方を誰にするのか、どのようなお話をいただくのか、グループごとに考え、プレゼンすることで、グループで意見を出し合う力や深く調べて他者に魅力が伝わるようにプレゼンする力が身に付きました。」「他の学生をまとめることを初めて経験しました」という回答からは、「どういう講演会にするのか」ということをグループで話し合うなかで、グループをまとめる力（リーダーシップ）、他者の意見を聞く力（傾聴力）、異なる意見を活かし合う力（協調性）を身に着けたことが窺える。

次に、「②企画・運営した内容についてプレゼンテーションを行う（プレゼンテーション能力の獲得）」についてである。「最初の企画立案、すべてを調べて魅力が伝わるようにプレゼンをすること自体、初めての経験でした。」「深く調べて他者に魅力が伝わるようにプレゼンする力が身に付きました。」「プレゼンなどは去年より積極的に、より深く考えることができた。」「プレゼン力や仕事を考えることが出来るようになった。」といった回答がみられた。これらの回答にみられる「すべてを調べて」「深く調べて」「深く考える」といった言葉や、「講演の内容を深めていくべく、実際講演をして頂く方のことを事前に自分たちなりに理解しておく必要性を感じた」からは、「活動」によるスキルの獲得だけでなく、講演会のコンテンツを重視した学び方を学生が身につけていることが分かる。

最後に、「③役割分担を行い、講演依頼、広報、当日の運営を学生主体で実施する（企画を実行・運営する力、チーム活動能力の獲得）」についてである。図表2は、講演会を企画・運営するなかで獲得した具体的なスキルに関する回答である。また、このほかにも、「1つのプロジェクトを企画から運営まで初めて行い、大変さを痛感した。タイムスケジュールの作成にあたり、それぞれの役割をどのように動けば一番効率良いかを考えるのが、とても大変だった。しかし、それにより、周りのことを考えながら、今自分ができることを探し、行動する力、企画する力が養われたと思う。」「企画・運営を一から行い、全員で協力して一つのものを作り上げるということを初めて経験した。」「各グループのメン

図表2 授業の学習効果（企画を実行・運営する力、チーム活動能力）

企業とのやり取りの仕方など、勉強になりました。
仕事や人数配置を考えることができるようになったと思う。
いかに早く講演者と話し合えるかが、講演会を実施するには大切だと感じた。
自分たちの興味のある内容だからという単純なものではなく、資金やグッズ、日程など、多くの要素を考慮することを学んだ。
講演会のメールを送る経験を初めてして、送り方について学ぶことができました。講演会の司会を担当し、人前で話す貴重な経験をすることができました。
学生や先生、講演者の谷川先生と連携を取るのが難しかったですが、その中で色々自分で考えながら行うことができた。
実際に専門業者の方とお会いして作成したいものを伝える時には、こちらが出来る限り具体的にイメージを提示し、業者の方の要望と擦り合わせていくことで徐々に形になっていく流れを学ぶことが出来ました。
1つのプロジェクトを企画から運営まで初めて行い、大変さを痛感した。タイムスケジュールの作成にあたり、それぞれの役割をどのように動けば一番効率良いかを考えるのが、とても大変だった。しかし、それにより、周りのことを考えながら、今自分が出来ることを探し、行動する力、企画する力が養われたと思う。

(下線は、筆者らによる。)

パートと仕事を適材適所で分配して、進捗を確認し合うことの大切さを学びました。」といった回答があった。これらは、受講者が、個人レベルで獲得したスキルだけでなく、一つの目標に向けて協調しあいながら成し遂げるチーム活動能力を獲得したことを示す回答である。

アンケートでは、このほかに、授業および講演会について自由記述で回答を求めた。「学校の授業なのに、すべて自分たちで計画し、行動するという構成が新鮮で楽しかった。」「『何も決まっていな授業』ということで、最初はどうなるんだろう？と不安に思いましたが、その分、自由がきくので、自分たちのやりたいことができるし、とても充実していたと思います。」といった回答は、本授業が、学生たちの「大学の授業」に対するパラダイム転換に寄与したことを窺わせる。さらに、「企業に行く人向けの授業なのかなと思っていたが、全くそんなことはなく、もっと認知度が上がれば良いのと思った。」「ゼロから企画をして運営する経験は、残りの大学生活はもちろんのこと、社会人になってからも生きる力であったと考えます。」という学生の言葉は、本授業での取り組みが、大学での学びの枠を超え社会的なものへと拡張していることを示している。

本学創設者の成瀬仁蔵は、日本女子大学校での学びの目的について、「学校内に在りて、既に完成せ

る所の人物を社会に出すを原則とせず。自ら完成する力を有し、且つ其の方法を知れる所の人物を社会に出すこと」⁽⁴⁾にあると述べている。「社会人になってからも生きる力」を身につけたとする学生の言葉は、こうした成瀬の教育理念を受け継ぐものであると考える。

IV. おわりに

本講演会とそれに至る諸活動は、どのような教育的な意義があるのだろうか。「教育学科の会」担当教員の3名が、それぞれの視点から見解を述べて結びとする。

1. 教員のまとめ（齋藤）

本年度、「プロジェクト実践演習Ⅱ」は科目設置から3年目を迎えた。前年度比約2倍という大幅な履修者増に加え、担当教員変更も重なった本年度は、試行錯誤の1年であった。

学生たちが講演会を計画し、学生たち自身が主体的に「活動」しなければ何の成果も得られない授業のなかで、学生たちは「どうすれば自分たちが企画しようとする講演会の魅力を理解してもらえるか」「どうすればコミュニケーションを円滑にとることができるか」「どうすれば作業を協調して進められるか」といった客観的に自分のすべきことを見つめ

なおす作業を繰り返していく。授業に関する学生アンケートからは、こうしたいいわゆるメタ認知の効果を獲得できた学生と、あくまで「指示を待ち」、教員やリーダーとなる学生の指示によって「活動」をする学生との両極になってしまったことが窺えた。

その要因は一つではないが、プレゼンや講演会といった「成果物」に至るまでの学生の活動の過程を記すワークシートやポートフォリオシステムである manaba 等の活用などの工夫の欠如は、授業者としての大きな反省点である。もちろん授業においては、グループごとに「今日の活動と今後の課題」を発表し、全体での活動内容の共有化は行っていたが、発表形式での振り返りではグループリーダーの学生に依存する体制をつくりかねず、学生の学びの過程は部分的にしか明らかにならない。さらに、主体者である学生が次の活動を調整・改善していきけるように、全体を俯瞰しながらフィードバックする役割を担う教員にとっても、学生の活動の過程を記すワークシートや manaba 等の活用は、指導において、当然のことながら有効である。

既述の通り、本年度は、科目開設の2016年度から授業を担当してきた教員2人のうち1人が交代となり、授業目標・内容そのものの教員間での理解レベルの調整は予想以上に難しいものであった。大学でのプロジェクト型学習のアクティブラーニングにおいて、教員の専門性や資質・能力に左右されることなく授業を担っていくためには、「①授業内での作業内容、②グループの課題、③個人の課題、④宿題での作業内容、⑤教員からのコメント」といった項目からなるワークシート等の活用が不可欠である。授業や学生の実態と教員の理解との齟齬を埋め、経験年数が浅くても教員が授業の傍観者にならないための仕掛けの必要性に気づかされた一年であった。

2. 教員のまとめ（大谷）

「プロジェクト実践演習Ⅱ」における活動は、企画内容の立案・検討、そのプレゼンテーション、講演会の広報・運営、講演会の様子の発信など多岐にわたり、それぞれの活動に対して自学・自動的な姿勢で取り組む学生が至る所で見受けられた。一人ひとりの学生がこれまで学んできたことや経験を参照しながら、自らの能力をより実践的な場で発揮していたように思う。力量を存分に発揮できなかったと

感じる学生にとっては、その経験が次の実践の場できつといきるはずであろう。

授業の中で発揮された力量は、異質な集団における自律的な活動の中で、相互作用的に道具を用いる際に発揮されたものであり、まさに経済協力開発機構（OECD）の DeSeCo プロジェクトで定義されたコンピテンシーに他ならない。それは現代社会を生きる全ての人々にとって不可欠なものである。この授業を通して得られた多くの経験が、これから先の様々な場面で遺憾なく発揮されることを願っている。

3. 教員のまとめ（田中）

「プロジェクト実践演習Ⅱ」に対する見解については、担当教員の齋藤准教授と大谷助教にお任せすることとし、私からは自分自身が参加したバンダイ・プロジェクトの講演会についてコメントする。

「創造（creation）は想像（imagination）以上だ！」というタイトルのもと、どのような講義になるのかと楽しみにしていたところ、講師のお二人は、「想像以上」に楽しいお話と実技を織り交せてくださった。ここで得た知識と「技」は、学生たちが将来の教職の仕事、地域活動やNPO活動、あるいは家庭教育や社会教育の仕事の中で、きっと活かすことができるかと確信できた。企画、講師選定、当日の運営などを経て、一つのプロジェクトをこのような形で実らせた経験は、実践力のある社会人としての貴重な財産になるであろう。

<注>

- (1) 齋藤慶子・吉崎静夫・唐澤るり子・渡邊巧・田中雅文「唐澤富太郎と博物館－学校教育・社会教育における博物館利用の可能性－」『人間研究』第53号、2017年、pp.67-79、および齋藤慶子・久保田雅人・渡邊巧・藤田武志・田中雅文「つくってまなぼ！－久保田雅人氏に聞く造形教育－」『人間研究』第54号、2018年、pp.77-86、参照。
- (2) 2018年度前期「プロジェクト実践演習Ⅱ」の講義計画（シラバス）より引用。
- (3) 同上、参考。
- (4) 『成瀬仁蔵著作集』第3巻、日本女子大学、1981年、p.148。